

ベルクソンにおける記憶の想起としての創造

金子智太郎

序論 創造と記憶

ベルクソン(Henri Bergson)は第三主著『創造的進化』(1907)第一章冒頭で、第一主著『意識に直接与えられたものについての試論』(1889)と第二主著の『物質と記憶』(1896)の結論を振り返りながら、「持続(durée)」としての私達の存在について論じている。ここからベルクソンが考える創造(création)と記憶の持続を介した結びつきが理解できる。持続とは現在と過去が不可分の連続的な変化である。そして、持続の記憶とは現在と連続した過去全体に他ならない。「このような過去の残存の結果、意識にとって同じ状態を二度通ることが不可能になる。」(EC.5.)そのため、持続は常に新しく、予見できない。『創造的進化』のなかで、ベルクソンはこのような絶えず新しくなる持続を創造的と呼んでいると言えるだろう。それに対して、私達から独立した「もの(chose)」の創造は不条理であると述べられている⁽¹⁾。ベルクソンが考える創造は「自己による自己の創造」(EC.7.)であり、持続による持続の創造だろ⁽²⁾。次のベルクソンの文章は持続、記憶、創造の結びつきを端的に示していると言える。「意識をもつ存在にとって、存在するとは変化すること、変化するとは成熟すること、成熟するとは自己自身を無限に創造することである。」(EC.7.)

このような予見できない変化としての持続の創造を論じるとき、ベルクソンはしばしば芸術に言及した。『意識に直接与えられたものについての試論』から最後の主著『道徳と宗教の二源泉』(1932)まで、ベルクソンは一貫して芸術を持続の典型と考える。例えば、『創造的進化』第一章冒頭では次のように述べている。

出来上がった肖像画はモデルの人相や、芸術家の本質や、パレットの上に溶かされた絵の具によって説明される。しかし、説明するものの知識があったとしても、肖像画がどうなるか正確に予見することは誰にも、芸術家自身にもできなかつただろう。〈中略〉私達が制作者である、私達の生命の諸瞬間にについても同様である。生命の諸瞬間のそ

それぞれがある種の創造である。(EC.6-7.)

また、作品が予見できない変化を続けると同時に、「画家の才能は自分が制作した作品にまさに影響されて、形成されたり崩されたり、ともかく変容する」(EC.7.)とも言われている。本論ではこのような全体的な変化のプロセスを芸術制作と呼ぶことにしよう。

『創造的進化』で論じられた創造と記憶の結びつきをふまえて、本論はベルクソン哲学における創造や芸術制作について理解を深めるためのひとつの手がかりとして、『物質と記憶』における記憶論を考察する。特に、創造という一見不可解な行為のプロセスを考えるとき、記憶論は独自の具体的な内容を提供できるのではないか。というのは、ベルクソンは知覚や身体の観察、健忘症の分析などにもとづいて記憶の想起のプロセスを論じたからだ。ただし、本論はあえてベルクソンが想起について論じた記述を詳しく検討することを避ける。まず、第一節でこの議論が『物質と記憶』全体の構成において特殊な位置にあることを指摘し、そこからいくつかの疑問を提出する。そして、第二節において同著の議論の内から解決を提案する。このような仕方で想起を考えるために大きな枠組みを示し、独自の批判的な解釈を試みる。このとき、ドゥルーズ(Gilles Deleuze)が『ベルクソニズム』(1966)で論じた「現実化(actualisation)」概念、およびベルクソン哲学における方法の諸契機の区別を参考にしたい。第三節、第四節では想起についての解釈を補強し、発展させるため、『物質と記憶』の身体論、健忘症論を検討する。ここから想起のプロセスに存在する諸契機が明らかになるだろう。最後に結論として、想起のプロセスを創造や芸術制作のプロセスに重ねてみると、どのようなことが言えるか考えたい。

第一節 物質と記憶の区別と結合

ベルクソンの第二主著『物質と記憶』は、表題や副題「身体と精神の関係についての試論」とおり、一貫して物質的なものと精神的なものの関係を論じている。知覚と物質が同じ「イメージ(image)」であると主張する同著第一章に統いて、ベルクソンは第二、第三章で脳と記憶の区別を試みる。脳を含む物質は自然法則に従って相互に作用、反作用している。そのため法則の完全な知識があれば物質の未来を予見できる。したがって、物質に新しいものは何もないと言える。言いかえれば、物質は絶えず現在を反復する。物質は過去、歴史をもたず、記憶をもたない⁽³⁾。それに対して、序論で述べたように精神は記憶をもち、二度と同じ現在を繰り返さない。精神は常に新しく、予見できない。ベルクソンは物質と記憶に「本性(nature)」の区別があると述べている。

このような区別を証明するために、ベルクソンは物質と記憶の区別の問題を健

忘症、特に失語症の問題に限定した。健忘症は脳の損傷によって起こるから、脳と記憶には何らかの関係があることは疑えない。もし、記憶が脳の内に保存されているならば、脳の特定の部分は記憶の特定の部分に対応しているはずだ。しかし、ベルクソンは失語症を分析し、脳の損傷部分と失われる語には対応がないことを明らかにした⁽⁴⁾。「したがって、物質の内に記憶が貯蔵されると考えても何も得るものはない。」(MM.166.) 本論第三節で詳しく述べるが、ベルクソンは脳の働きを記憶の想起の補助に限定する。そして、過去は物質から独立して自己を保存し、自発的に想起されると考える⁽⁵⁾。

物質と記憶の区別の次に問題となるのは両者の結合である。記憶は持続である私達の行為を実際に決定している。ただし、行為する身体、脳、知覚、物質は「現実的(*actuelle*)」であるのに対して、記憶は本来「潜在的(*virtuelle*)」であり、つまり知覚されることも、物質の作用を受けることもない。そして、記憶が行為を決定するためには脳に作用し、知覚に混入する必要がある。そこで、ベルクソンは記憶が潜在的状態から現実的状態に移行すると考える⁽⁶⁾。このような移行が記憶の想起である。ベルクソンは想起を、記憶が「現実化する(*s'actualiser*)」、「実在化する(*se réaliser*)」、「物質化する(*se matérialiser*)」など、さまざまな仕方で呼んでいるが、本論では現実化が最も妥当であると考える⁽⁷⁾。その理由のひとつは、ベルクソンが過去は潜在的な状態でも物質と同じく実在的であると述べているからだ⁽⁸⁾。もうひとつの理由は後に述べよう。本論はこの記憶の想起、現実化のプロセスを明らかにすることが、ベルクソン哲学における創造や芸術制作を理解する手がかりのひとつになるだろうと考える。そして、序論で述べたことを繰り返すが、本論はあえてベルクソンが想起について論じた記述を詳しく検討することを避ける。まず、本節でこの議論が『物質と記憶』全体の構成において特殊な位置にあることを指摘し、そこからいくつかの疑問を提出する。そして、第二節において同著の議論の内から解決を提案する。このような仕方で想起を考えるために大きな枠組みを示し、独自の批判的な解釈を試みる。本論は想起を理解するためにこの議論の位置づけを検討することが不可欠であると主張する。

ベルクソンは『物質と記憶』第二、第三章で物質と記憶の区別、および記憶の想起を論じた後、第四章の冒頭において同章では物質と記憶の結合を論じると述べている⁽⁹⁾。ベルクソンによれば、両者の結合は両者の本性の区別を前提としている。したがって、区別と結合は『物質と記憶』の構成における不可逆な二つの契機と呼べるだろう。詳しい説明は省略するが、ベルクソンは物質と記憶の結合を理解するために、物質の概念を再検討し、物質もまた一種の持続であるとみなす⁽¹⁰⁾。物質とは現在と過去の結びつきが限りなく弛緩した持続であると言えるだろう。それに対して、精神はより収縮した持続である。物質と精神は「緊張

(tension)」またはリズムによって区別され、物質と記憶は緊張の異なる持続として結合される⁽¹¹⁾。さらに、ベルクソンは持続に無数の緊張があると考える。この持続の無数の緊張を理解するために、ベルクソンが『思考と動くもの』(1941)所収の「形而上学入門」の中で、色彩のスペクトルに喩えた記述を引用しておこう。

厳密に言えば、私達の持続以外の持続は存在しないかもしれない。

例えば、世界にオレンジ色以外の色彩がないかもしれないよう。しかし、色彩からなる意識がオレンジ色を外部から知覚する代わりに内部から共感して、自分が赤と黄色の間を占めていると感じ、その後者の色彩の下に赤から黄色に向かう連続が自然に伸びているスペクトル全体を予感するのと同じように、持続の直観は純粋な分析が行うように私達を空虚に吊るしたままにするのではなく、私達を持続の連続全体と接觸させる。(PM.210.)

物質と記憶の二元論の契機に統いて、ベルクソンが『物質と記憶』第四章において論じるのは持続の一元論の契機であると言えるだろう。

以上のような『物質と記憶』第四章をふまえて、再び記憶の想起について考えると、次のような疑問が提出できるのではないか。まず、持続の一元論以前に、想起の問題は物質と記憶の結合を論じているのではなかったのか。先に触れたように、想起が物質化と考えられるならば、このことはより明らかである。なぜ物質と記憶の結合が二度、異なる仕方で論じられているのか。次に、『物質と記憶』第四章は最終章であるが、物質の概念を再検討し、その定義が大きく変わったにもかかわらず、なぜベルクソンは想起も再検討しないのか。物質もまた一種の持続であり、現在と過去が結びついているならば、言わば限りなく弛緩した記憶をもつと言えるのではないか。そして、物質が記憶をもつならば、想起を物質化とみなす理解も再検討される必要があるだろう。次節ではこれらの問題を検討し、記憶の想起のプロセスについての本論の解釈を提示したい。そして、この解釈がドゥルーズ『ベルクソニズム』における『創造的進化』についての議論と結びつくことを指摘しよう。

第二節 現実化および差異化としての記憶の想起

ベルクソンは『物質と記憶』第二、第三章で物質と記憶の区別と記憶の想起を論じ、第四章で物質と記憶の結合を論じる。しかし、本論は想起の問題が両者の結合、持続の一元論をふまえて論じられるべきだと考える。なぜなら、結合の契機においては物質の概念が再定義されるが、この新しい定義が想起を理

解するために不可欠だと思われるからである。物質もまた一種の持続であり、一種の記憶をもつと言えるならば、物質の記憶もまた作用を決定するために想起されると想定することができるのではないか。そこで、想起を物質化とみなす理解を改める必要があるだろう。先に想起を現実化とみなすのが最も妥当であると述べたのはこのためである。

持続の一元論をふまえて記憶の想起、現実化を論じるために、まず物質の再定義の後に潜在的なものと現実的なものの関係がどうなるのかを検討しよう。先に述べたとおり、物質と記憶を区別する際、物質は現実的、記憶は潜在的であり、記憶は潜在的状態から現実的状態に移行するとされた。しかし、物質が一種の持続であり、一種の記憶をもち、その記憶が想起されるならば、物質の記憶もまた潜在的状態から現実的状態に移行することができる。したがって、物質と記憶の結合の契機においては現実的なものと物質が区別されると言えるだろう。では、このとき現実的とは何を意味するのか。持続の一元論をふまえて、現実的なものも持続の在り方から理解するべきだろう。ここで、本論は『物質と記憶』におけるベルクソンの次のような記述に注目する。「脳は、残りの物質的宇宙全体とともに、宇宙的生成の絶えず新しくなる断面である。」(MM.165.)物質の再定義の後では、この引用などで述べられている生成、つまり持続とその断面の関係は、潜在的なものと現実的なものの関係にこそ当てはまるのではないか。つまり、潜在的なものとは変化し続ける持続そのものであり、現実的なものとは絶えず新しくなるその断面だろう。潜在的なものと現実的なものは持続の二つの状態と考えることができる。

以上のように潜在的なものと現実的なものを再定義すると、記憶の想起は次のように捉え直せるのではないか。潜在的な記憶は変化し続ける持続そのものである。そして、変化し続ける持続が生み出す絶えず新しくなる断面は現実的な身体に作用し、知覚に混入し、行為を決定する。このような解釈はベルクソンの『精神的エネルギー』(1919)所収の論文「現在の記憶と誤った再認」における、現在の「二重化(dédoulement)」についての次のような記述と一致する。

したがって、私達の生命はどの瞬間にも二つの側面を見せる。それは現実的であり、潜在的である。一方では知覚であり、他方では記憶である。それは生じると同時に分裂する。(ES.136.)

「私達は、記憶の形成は知覚の形成の後では決してなく、同時(*contemporaine*)であると主張する。」(ES.130.)同論文では持続とその断面について言及されていないが、両者の関係はまさに分裂、二重化と言えるだろう。そのため厳密に言えば、潜在的状態から現実的状態に「移行する」、現実「化」という表現もあまり適当でない。以上が、本論が提案するベルクソン哲学における記憶の想起の解釈

である。

ここで、物質と精神の関係を再び考えてみよう。持続の一元論において物質と精神は持続の異なる緊張として結合している。ただし、この結合は潜在的である。なぜなら、現実的状態では精神は常に新しく、予見できず、創造的であるが、物質は自然法則に従い、現在を反復するからだ。持続の二つの状態における両者の関係は異なり、潜在的状態では結合されているが、現実的状態では区別される。したがって、両者は現実化すると同時に区別されると言えるだろう。この区別は先に触れた本性の区別であり、現実化によって本性の区別が生みだされると言いかえることができる。

以上の議論はドゥルーズが『ベルクソニズム』において『創造的進化』を論じた章で、生命の進化における現実化と「差異化(différenciation)」の関係について述べた記述と一致する⁽¹²⁾。

要するに、潜在性(virtualité)に固有なものは、差異化しながら現実化するという仕方で、そして現実化するためには差異化し、差異化の線を創造せざるを得ないという仕方で存在することである。(B.100.)

これまででも述べておいたが、本論は記憶の想起を考えるために、現実化の概念についてのドゥルーズの解釈を参考にした。特に重要なのは、ドゥルーズが『ベルクソニズム』のなかでベルクソン哲学における方法の諸契機を区別し、潜在的なものの現実化についての議論を物質と精神の結合の契機の次の契機とみなしていることである⁽¹³⁾。簡単に説明すると、ドゥルーズによればベルクソン哲学の方法は四つの契機に区別される。第一契機は物質と精神の区別、「反省的(réflexif)二元論」(B.98.)の契機、第二契機は言わば両者の結合を準備する契機であり、第三契機は結合の契機、持続の一元論である。そして、第四契機は差異化の契機、「発生論的(génétique)二元論」(B.99.)とされる。現実化についての議論はこの第四契機に位置づけられる。ドゥルーズは『意識に直接与えられたものについての試論』と『物質と記憶』が方法の第三契機までに、『創造的進化』の生命の進化論が第四契機に当たると述べている。しかし、本論は記憶の想起もまた第四契機において検討されるべきだと考える。

ここで、ドゥルーズに従ってベルクソン哲学におけるいくつかの区別、つまり差異(différence)を整理しておこう。まず、大きく分けて方法の第一契機に位置する反省的二元論と第四契機に位置する発生論的二元論という二つの差異がある⁽¹⁴⁾。前者は例えば脳と記憶の差異であり、通常は混同されているが失語症の分析にもとづいて反省され、区別される。詳しい説明は省略するが、この差異は先に触れたように本性の差異であり、「程度(degré)」の差異と区別される。他

方、発生論的二元論は無数の緊張をもつ持続から自発的に生まれる物質と精神の差異であり、生命の進化におけるさまざまな進化の線の差異である。厳密に言えば、この差異は潜在的なものと現実的なものの差異と、物質と精神やさまざまな進化の線の差異に分けることができる⁽¹⁵⁾。先に説明したように、これら二つの差異は同時に生まれる。そして、このような発生論的二元論は反省的二元論における本性の差異を生み出すと言うことができる。

ドゥルーズは『創造的進化』の読解にもとづいて、「進化は現実化であり、現実化は創造である」(B.101.)と述べている。このような記述は、記憶の想起は現実化であり、想起のプロセスを明らかにすることは創造を理解する手がかりのひとつになるだろうという本論の主張と一致する。ドゥルーズは『創造的進化』と『物質と記憶』のつながりは完全に厳密である(B.103.)とも述べている。『物質と記憶』の議論の内から記憶の想起が現実化であり、物質と精神の差異化でもあるという結論を導く本論の解釈もまた、両著のつながりを支持している。

第三節 記憶の想起と身体論

本節と次節ではこれまで論じてきた記憶の想起についての解釈を検証し、発展させるため、『物質と記憶』におけるベルクソンの身体論、健忘症論を検討する。本節では記憶の想起と身体の関係を明らかにしよう。ベルクソン哲学において身体論はまず混同された物質と記憶の区別の契機、ドゥルーズの言葉で言えば方法の第一契機、反省的二元論において重要な意味をもつ。先に述べたとおり、ベルクソンは主に失語症の分析にもとづいて、物質と記憶には本性の区別があり、記憶は物質から独立して自己を保存し、自発的に想起されると主張した。ただし、このような記憶が想起できるのは物質のなかで身体の内だけである⁽¹⁶⁾。健忘症は脳の損傷によって起こる。ベルクソンは『物質と記憶』第二章で、しばしば脳を記憶の「枠(cadre)」と呼んでいる。記憶はこの枠の内のみで想起され、この枠に入らない記憶は想起されない。想起された記憶は脳に作用し、知覚に混入して行為を決定する。なぜ、脳だけがこのような特権をもっているのか。記憶の想起における身体の役割は何なのか。

ベルクソンが身体を観察した記述を詳しく検討していく。ベルクソンは身体を「感覚一運動システム(systèmes sensori-moteurs)」とみなしている。「身体を行ふ行為の中心と、ただ行為の中心とだけ仮定しよう。」(MM.256-257.)このシステムの中心には神経系、脳があり、ここに身体が受けた作用を特定の組織された身体運動に結びつけるメカニズムがある。ベルクソンはこのメカニズムの働きに、本論がこれまで論じてきた記憶とは別のタイプの記憶を認めている。学課の暗記を典型とするこの記憶は過去を想起するのではなく、単に受けた作用と反作用、つまり身体運動を結びつける⁽¹⁷⁾。暗記にはこの結びつきだけが重要で、記憶の想起

はむしろ暗記を妨げてしまう。後に再び論じるが、健忘症の研究によってこのタイプの記憶が予想以上に私達の生活の大部分を支えていることがわかる。例えば、このタイプの記憶だけで簡単な質問に答えることができるし、この記憶が失われると、自宅で自分の場所がわからなくなってしまう⁽¹⁸⁾。とはいっても、このタイプの記憶は組織されたメカニズムに過ぎず、新しいものを生むことはない。

ただし、ベルクソンは『物質と記憶』第一章でこの脳のメカニズムが独特な働きをすると述べている。脳は身体が受けた作用の一部を同時に無数の身体運動に結びつけることで、身体運動どうしを衝突させて相殺し、散失させてしまうことができる。

このように脳の役割は、あるときは集約された運動を選択された反作用の器官に導くこと、あるときは運動が含む可能的な反作用のすべてをそこに描き出し、運動そのものを分解し、散失させるために、運動に対して運動路の全体を開くことである。(MM.26.)

このような脳の働きによって身体は物質の内で唯一、作用に対して反作用を返さずにとどまることができる。言いかえれば、自然法則に従う物質の作用、反作用のつながりを阻止することができる。こうして、脳の内に特定の反作用が決定されない状態、非決定の状態ができる。「神経系は表象ではなく、むしろ非決定を目指して作られたように見える。」(MM.29.)ただし、脳の働き 자체は自然法則に従っている。ベルクソンの言葉を借りれば、身体は「メカニズムに打ち勝つ機械」(EC.264.)であり、言わば物質を利用して物質を阻止する。

ベルクソンが脳を他の物質から区別する特徴はこのような物質を阻止する働きだけである。したがって、脳が記憶の枠であるのはこの働きのためだろう。そして、記憶は物質が阻止されるだけで想起されると言うことができる。このことは、『物質と記憶』では明確に論じられていないが、ベルクソンが『創造的進化』において生命に対する物質の抵抗、生命と物質の衝突と呼んだものを思い出させる。

生命の跳躍(*élan de vie*)は絶対的には創造することができない。なぜなら物質と、つまり自己の運動とは反対の運動とともに衝突するからである。しかし生命の跳躍は必然性そのものである物質を捉えて、そこできだけ多くの非決定と自由を導入することを目指す。(EC.252.)

ここで、記憶の想起についての本論の解釈を振り返ろう。無数の緊張をもつ持続の内で結合していた物質と精神は現実化すると同時に区別される。このとき、区別される両者が衝突すると言えるのではないか。ベルクソンが『精神的エネ

ルギー』所収の論文「意識と生命」、「知的効力」などで論じた生命の「効力 (effort)」が必要とされるのは、このような現実化における衝突のためだろう⁽¹⁹⁾。持続は絶えず新しい断面を生み出すが、記憶は常に行為を決定できるわけではない。私達の行為が常に創造的とは言えない理由は物質の抵抗にある。

したがって、ベルクソンの身体論は物質と精神の区別の契機、反省的二元論だけではなく、記憶の想起の契機、発生論的二元論においても重要な意味をもつ。身体の役割は、物質と記憶の衝突の際に、物質を利用して物質を阻止し、記憶の想起を補助することと言えるだろう⁽²⁰⁾。そして、物質との衝突を記憶の想起のプロセスにおける最後の契機と呼ぶことができるのではないか。もし、記憶が想起において自発的に物質化するならば、物質と精神の衝突はどこに位置づけられるのかわからなくなる。そのため、ベルクソンの身体論は記憶の想起についての本論の解釈と少なくとも矛盾せず、むしろ解釈を支持するように思われる。

第四節 記憶の想起と健忘症論

記憶の想起についての本論の解釈をさらに発展させるために、『物質と記憶』第二、第三章における健忘症論を検討しよう。これまでの議論から、健忘症は脳の損傷によって起こるが、より深い原因は物質の抵抗にあると考えられる。まず、ベルクソンによる健忘症の分類をまとめよう。ベルクソンが分析した健忘症は大きく四つのタイプに分類できるだろう。第一のタイプは特殊な健忘症で、記憶は想起されるが、目の前の対象を再認できないという症状である⁽²¹⁾。例えば、患者は自分の住む町を思い浮かべることはできるが、実際に見てみると自分がどこにいるかわからない⁽²²⁾。第二のタイプは通常の健忘症である⁽²³⁾。このタイプの健忘症の特徴的な症状は、失語症において言語が法則に従って徐々に失われることである⁽²⁴⁾。常にまず固有名詞、次に普通名詞、最後に動詞が失われる。第三のタイプは精神異常 (aliénation) の際に起こる記憶の混乱である⁽²⁵⁾。現実と無関係な記憶が幻覚として現れ、現実感が失われる。このタイプの健忘症には臨死体験における記憶の異常な増大も含めることができるだろう⁽²⁶⁾。最後の第四のタイプは人格分裂 (les scissions de la personnalité) の際に起こる部分的な健忘である⁽²⁷⁾。このタイプの失語症においては特定の単語が失われることもあるが、学んだ特定の言語全体が失われることもある。

次に、以上の四つのタイプの健忘症に対するベルクソンの解釈と、これらが記憶の想起に関して何を明らかにするかをまとめよう。いずれのタイプも脳の損傷によって起こるが、記憶そのものが失われるのではない。損傷するのは、あるときは物質の作用を、あるときは物質を阻止して記憶の作用を組織された身体運動に結びつけるメカニズムである。ベルクソンは第一のタイプの健忘症が物質の作用を組織された身体運動に結びつけるメカニズムの損傷によって起こると考える。

つまり、先に説明した学課の暗記を典型とする記憶の健忘症である。このタイプは真の記憶の想起とはあまり関係がないが、もうひとつの記憶の存在と働きを理解する手がかりとなる。第二のタイプと第三のタイプの健忘症は同じ原因、何らかの毒素による脳の機能全体の「力学的減退」(MM.196.)によって起こることがわかっている。このとき脳は物質を阻止し、記憶の作用を身体運動に結びつけることが難しくなるだろう。そのため、記憶が想起されず、失われたように見えるか、混乱して想起され、幻覚として現れる。ベルクソンは第二のタイプの失語症の固有名詞、普通名詞、動詞の順に失われる法則が、身体運動と結びつきにくい順であると述べている⁽²⁸⁾。動詞が最も容易に身体運動と結びつくから、最後に失われる。したがって、このタイプの健忘症からは想起された記憶が脳に作用することなどが明らかになる。

第四のタイプの健忘症は部分的な脳の「機械的減退」(MM.196.)によって起ることがわかっている。この健忘症の分析では、失われたように見える記憶のグループを理解することが重要である。詳しい説明は省略するが、特定の単語や特定の言語全体など、想起できなくなる記憶のグループを記憶全体の部分みなすことはできない⁽²⁹⁾。ベルクソンは特定の記憶のグループが記憶の特定の緊張に対応していると述べている。

例えば、過去の記憶の位置づけ(localisation)のプロセスは、かつて言っていたように、袋のなかに飛び込むように記憶の総体のなかに飛び込んで、次第に相互に接近する記憶を取り出すと、やがて位置づけようとする記憶がその間にいるといふものではない。〈中略〉実際は、位置づけの働きは拡張(expansion)の努力である。(MM.191.)

ある外国語の単語を耳にしたとき、その言語全体を思い出すこともあれば、以前にその単語を特定の仕方で発音した声を思い出すこともある。〈中略〉これらの連想は二つの異なる精神的配置(disposition)、記憶の緊張のはっきりした二つの程度に対応する。(MM.188.)

ベルクソンは第四のタイプの健忘症が、脳の機械的減退によって記憶の特定の緊張だけが想起されないために起こるとみなす。次の引用では、記憶の緊張が「音調(ton)」と呼ばれている。

例えば、ヒステリー患者の《組織的健忘》において失われたように見える記憶は、実際は現存する。しかし、その記憶はおそらく知的活力のある特定の音調に結ばれていて、患者はもはやその音調に身を置くことができない。(MM.189.)

先に本論は想起される前の潜在的な記憶を変化し続ける持続とみなした。そこで、ベルクソンが『物質と記憶』第三章で論じたこのような健忘症が、無数の緊張をもつ持続の在り方を示唆していると考える。記憶が想起されるとき、持続の無数の緊張のひとつが選択されると言えるのではないか⁽³⁰⁾。ベルクソンは想起される記憶の領域を選択する行為を「カメラの焦点合わせに似た、手探しの作業」(MM.148.)と呼んでいた。おそらく、この選択は記憶の作用が最終的に衝突する物質との関係で決定されるだろう。物質に抵抗に対して、最も容易に想起できる持続の緊張が選択されるのではないか。そのため、通常は現在の身体の状態に最も類似した知覚や観念がよみがえる⁽³¹⁾。選択された特定の緊張は、特定の知覚や観念として想起される。ただし、潜在的な持続の緊張と現実的な知覚や観念は対応するが、共通点はもたない。前者が身体に作用して後者を生み出すだけである。持続の無数の緊張からひとつを選択することを、記憶の想起のプロセスにおける最初の契機と呼ぶことができるだろう。

ベルクソンの身体論と健忘症論は本論の解釈を発展させ、記憶の想起のプロセスをより詳しく明らかにする。想起は持続の無数の緊張からひとつを選択する契機で始まり、物質との衝突の契機で終わる。そして、二つの契機の間には本論第二節で論じた持続がその断面を生み出す契機、言わば発生の契機がある。選択、発生、衝突は想起のプロセスにおける三つの契機と言えるのではないか。身体の役割は第三契機だけに関わっている。身体は物質の作用を阻止し、記憶の作用を受け入れて組織された身体運動に結びつけることで、記憶の想起を補助する。健忘症はこのような身体の働きが失われるために起こるが、より深い原因は物質の抵抗にあると考えられる。

結論 記憶の想起としての創造

まず、本論のこれまでの議論を要約しよう。本論はベルクソン哲学における創造や芸術制作について理解を深めるためのひとつの手がかりとして、『物質と記憶』における記憶論を考察してきた。ベルクソンが考える創造と記憶は持続を介して結びつくだろう。そして、創造という一見不可解な行為とは異なり、記憶論は具体的な内容、身体論や健忘症論に支えられている。そこで、記憶の想起についての議論は創造のプロセスを明らかにするために役立つはずだ。

想起についての議論は『物質と記憶』全体の構成において特殊な位置にあるだろう。本論はこの議論が同著最終章で論じられている物質と精神の結合の後に論じられるべきだと考えた。そして、まず物質と現実的なものを区別し、記憶の想起を潜在的な持続が絶えず新しい現実的な断面を生み出すことみなした。記憶の現実化とともに、持続の異なる緊張として結合していた物質と精神が区別される。このような解釈はドゥルーズが『ベルクソニズム』において『創造的進

化』を論じた記述と一致する。ドゥルーズによればベルクソン哲学において現実化は差異化であり、創造である。

次に、本論は想起についての以上のような解釈を検証し、発展させるため、ベルクソンの身体論と健忘症論を詳しく論じた。ここから明らかになったのは、観察にもとづく身体論が本論の解釈を支持するように見えること、および記憶の想起のプロセスにおける最初と最後の契機である。記憶が自発的に想起されるとき、まず持続の無数の緊張からひとつが選択される。そして、選ばれた緊張の持続はその断面を生み出す。最後に想起された記憶の作用が物質の作用と衝突する。選択、発生、衝突は想起の三つの契機である。第三契機において、物質を利用して物質の作用を阻止し、想起を補助するのが身体の役割である。身体は記憶を保存することはできないが、記憶は身体の内でしか想起されない。

最後に、これらの議論にもとづいてベルクソン哲学における創造や芸術制作を考えてみよう。ただし、記憶との結びつきを手がかりとする本論の方法は、創造を明らかにするためのアプローチのひとつに過ぎない。それも比較的困難なアプローチであると言わなければならない。『物質と記憶』では創造は論じられず、『創造的進化』では記憶は部分的に触れられるだけだからだ。また、本論はベルクソンが想起について論じた記述を詳しく検討することを意図的に避け、想起を考えるための大きな枠組みを示すにとどめた。さらに、本論でもわずかに言及したが、ベルクソンの記憶論は『物質と記憶』だけではない。したがって、本論の解釈は極めて限定的である。このことをふまえた上で、記憶の想起のプロセスを創造のプロセスに重ねてみると、どのようなことが言えるだろうか。

まず、創造の最初の契機として、カメラの焦点を合わせるように持続の無数の緊張からひとつが選択されるだろう。次に、変化し続ける潜在的な持続が絶えず新しくなる現実的な断面を生み出す契機がある。このような持続とその断面の関係は、潜在的な創造自体、芸術制作自体と、現実的な創造者と被造物、芸術家と作品の関係に当たるだろう。記憶が脳に位置づけられないように、現実的なものだけを考えるなら創造は理解できない⁽³²⁾。同様に芸術家や作品だけを考えるなら芸術制作は理解できないだろう。序論で引用したように、ベルクソンは芸術制作において作品だけでなく芸術家もまた変化すると考える。言わば芸術制作自体が絶えず新しくなる芸術家や芸術作品を生みだしている。創造のプロセスの最後の契機として、現実化した持続の作用が物質の作用と衝突する。物質の抵抗のために創造は努力を必要とする。このとき物質の作用を阻止することで創造を補助するのが身体の役割だろう。ところで、ベルクソンは『創造的進化』第二章において道具が身体の延長であり、道具を製作する能力が知性であると論じている⁽³³⁾。また、『思考と動くもの』所収の「可能的なものと実在的なもの」では、芸術制作には創造だけでなく「製作(fabrication)」という、芸術家の技術と関わり、物質を扱う反復可能な側面があると指摘している⁽³⁴⁾。そこで、こ

の製作という側面は、物質を利用して物質の抵抗を阻止し、芸術制作を補助していると言えるのではないか。

註

*本論ではベルクソンとドゥルーズの著作からの引用、参照を示すために略号をもちいる。ページ数は現行のPUF (Quadrige) 版による。また、引用内の付点は原文のイタリック体を、〈中略〉は文章の省略を示す。さらに、引用のなかで必要と思われる語の後に原語を付しておいた。

Henri Bergson

- ・*Essai sur les données immédiates de la conscience* (『意識に直接与えられたものについての試論』)=DI.
- ・*Matière et mémoire* (『物質と記憶』)=MM.
- ・*L'évolution créatrice* (『創造的進化』)=EC.
- ・*L'énergie spirituelle* (『精神的エネルギー』)=ES.
- ・*Les deux sources de la morale et de la religion* (『道徳と宗教の二源泉』)=MR.
- ・*La pensée et le mouvant* (『思考と動くもの』)=PM.

Gilles Deleuze

- ・*Le bergsonisme* (『ベルクソニズム』)=B.

(1) EC.249.

(2) 『創造的進化』においては、神の創造も同じように考えられていると言えるだろう。Cf. 241-242, 249.

(3) Cf. MM.11, 236, 250-251. EC.7-9, 38.

(4) Cf. MM.Chap. II, 266-268.

(5) Cf. MM.107-108, 165-167, EC.5.

(6) Cf. MM.148.

(7) ベルクソン自身も多くの個所で記憶の想起を物質化と呼んでいるが、ジャンケレヴィッチ (Vladimir Jankélévitch) やイボリット (Jean Hyppolite) ら多くの論者が物質化としての想起を重視していることは確かである。『意識に直接与えられたものについての試論』では結びつかなかった物質と精神が、『物質と記憶』では想起という接点をもつと考えられている。Vladimir Jankélévitch, *Henri Bergson*, PUF, 2e éd., 1959, p.117-118. Jean Hyppolite, "Aspects divers de la mémoire chez Bergson", in *Figure de la pensée philosophique*, PUF, 1971, p.472.

(8) MM.156-157.

(9) MM.199-203.『物質と記憶』発表の経緯と章構成の関係については、Cf. 石井敏夫「ベルクソンの記憶力理論 —— “物質と記憶”における精神と物質の存在証明 ——」、理想社、2001年、p.148-149。石井によれば、『物質と記憶』発表以前に内容の一部が三回に分けて発表されているが、このことから同著の成立過程を考察するには限界がある。ベルクソン自身は『物質と記憶』第二章が当初は第一章として構想されたと語っている (Jaques Chevalier, *Entretiens avec Bergson*, 1959, p.35.)。

(10) ベルクソンはこの物質概念の再検討において、物質を物体や粒子ではなく力線や流体とみなす十九世紀物理学の物質論を参照している (MM.225-226.)。

(11) Cf. MM.232.

(12) ドゥルーズは同著で生命の進化におけるさまざまな進化の線の差異化を現実化とみなしているが、物質と精神の差異化は論じていないという批判があり得るだろう。しかし、ドゥルーズは明らかに物質と精神の差異化と進化の線の差異化を結びつけている。「私達は、持続が物質と生命に分かれ、生命が植物と動物に分かれるとき、潜在的なままでいる限りでしか共存しない、異なる収縮の程度が現実化すると考えなければならない。」(B.104.)また「差異化の概念的図式」(B.106.)も参照。このようなドゥルーズの解釈に根拠がないわけではないだろう。ベルクソン自身も、例えば『創造的進化』第三章における花火(fuse)の比喩においては、物質と精神の差異化について語っているように見える。「意識または超意識は花火であり、火の消えた残骸は物質となって落ちていく。」(EC.261.)

(13) Cf. B.93-99. ドゥルーズのベルクソン解釈における方法の問題の重要性については、Cf. 前田茂「二つのイメージ —— ドゥルーズ『シネマ』にみるベルクソン解釈の展開 ——」、「藝術研究」、第11号、広島芸術学会、1998年、p.93-106。「要するに『ベルクソンの哲学』の全議論は、方法としての直観へと收敛するのであって、そこからこの著作は、ドゥルーズがベルクソンの方法を体系的に理解し、継承するための手続きだったと推察されるのである。」(p.94.)

- (14) Cf. B.97-99.
- (15) Cf. B.100.
- (16) 本節以降では議論の便宜のために、記憶という語で精神の記憶だけを指すことにし、前節で論じた物質の記憶には触れないことにする。
- (17) ベルクソンが運動的図式(schéma moteur)と呼ぶものは、このメカニズムに他ならないのではない。ジャンケレヴィッチャ、運動的図式を記憶と物質が会う場所(rendez-vous)とみなす論者は多い(Vladimir Jankélévitch, *Henri Bergson*, PUF, 2e éd., 1959, p.116.)。このような論者は当然、記憶の想起を物質化とみなすはずだ。しかし、本論は物質と精神が結合するのは潜在的な状態においてであり、両者は現実化と同時に差異化するとみなすから、運動的図式が両者の間に位置づけられるとは考えない。
- (18) MM.91-92, 105.
- (19) Cf. ES.22, etc.
- (20) 身体がなければ、私達は剥き出しの物質の抵抗に晒される。これは健忘症の状態でもある。では、原初的な生命はどうに身体を獲得したのか。この問題にベルクソンは次のように答えている。「生命が第一に回避しなければならない障害は剥き出しの自然の抵抗だった。生命は誤謬によってそれに成功したようだ。非常に小さくなり、巧妙になり、物理的、化学的諸力と妥協し、鉄道の転轍機が離れようとする線路の方向にしばらく沿って行くように、それらの諸力と少し道をともにすることも同意する。」(EC.99-100.)
- (21) Cf. MM.98-107, 118-128.
- (22) MM.99.
- (23) Cf. MM.104-105, 118-119, 131-134.
- (24) MM.132-134.
- (25) Cf. MM.194-197.
- (26) MM.172.
- (27) Cf. MM.189, 191-192, 195-196.
- (28) MM.133-134.
- (29) Cf. MM.182-185.
- (30) Cf. MM.115-116, 181, 184-192.
- (31) Cf. MM.104, 115-116.
- (32) Cf. EC.249.
- (33) 「このように、知性の基本的な能力は、物質を行ふの道具に、つまり語の語源的意味での器官(*organe*)に変形することを目指す。」(EC.162.)
- (34) PM.103.

Bergson's Theory of Creation as the Recall of Memory

KANEKO, Tomotaro

On the basis of the beginning of Bergson's *Creative Evolution* (1907), we can understand the connection between "creation" and memory mediated by "duration (durée)" in Bergsonism. Stated quite simply, our duration is creative because it has its own memory. In this essay, I consider Bergson's concept of the recall of memory in *Matter and memory* (1896) as one of the clues to understand his theories of creation and artistic production.

In my opinion, the recall of memory is concerned with the structure of this book, in which Bergson discusses the difference and union between matter and mind. These are the two irreversible moments in the structure. Even though Bergson analyzes the recall in the moment of the difference, we should also take the moment of the union into consideration to understand it.

In the moment of the difference, Bergson regards memory as originally "virtual" and matter as "actual" and states virtual memory actualizes itself when it is recalled. Bergson often identifies the actualization of memory with the materialization, but we can not regard matter as merely actual after the re-definition of matter in the moment of the union. Therefore, I suppose that virtual memory as duration continuously changing generates its actual "section (coupe)".

This interpretation can be supported by Gilles Deleuze's analysis of *Creative Evolution in Le Bergsonisme* (1966) and Bergson's theory of body and amnesia. In conclusion, I try to describe the process of creation and artistic production referring the various moments in the recall of memory.

**東京藝術大學
美術學部
論叢**

**JOURNAL OF
THE FACULTY OF
FINE ARTS
TOKYO NATIONAL
UNIVERSITY OF
FINE ARTS AND MUSIC**

創刊号

**平成17年4月
APRIL 2005**

**東京藝術大學美術學部
THE FACULTY OF
FINE ARTS,
TOKYO NATIONAL
UNIVERSITY OF
FINE ARTS AND MUSIC**